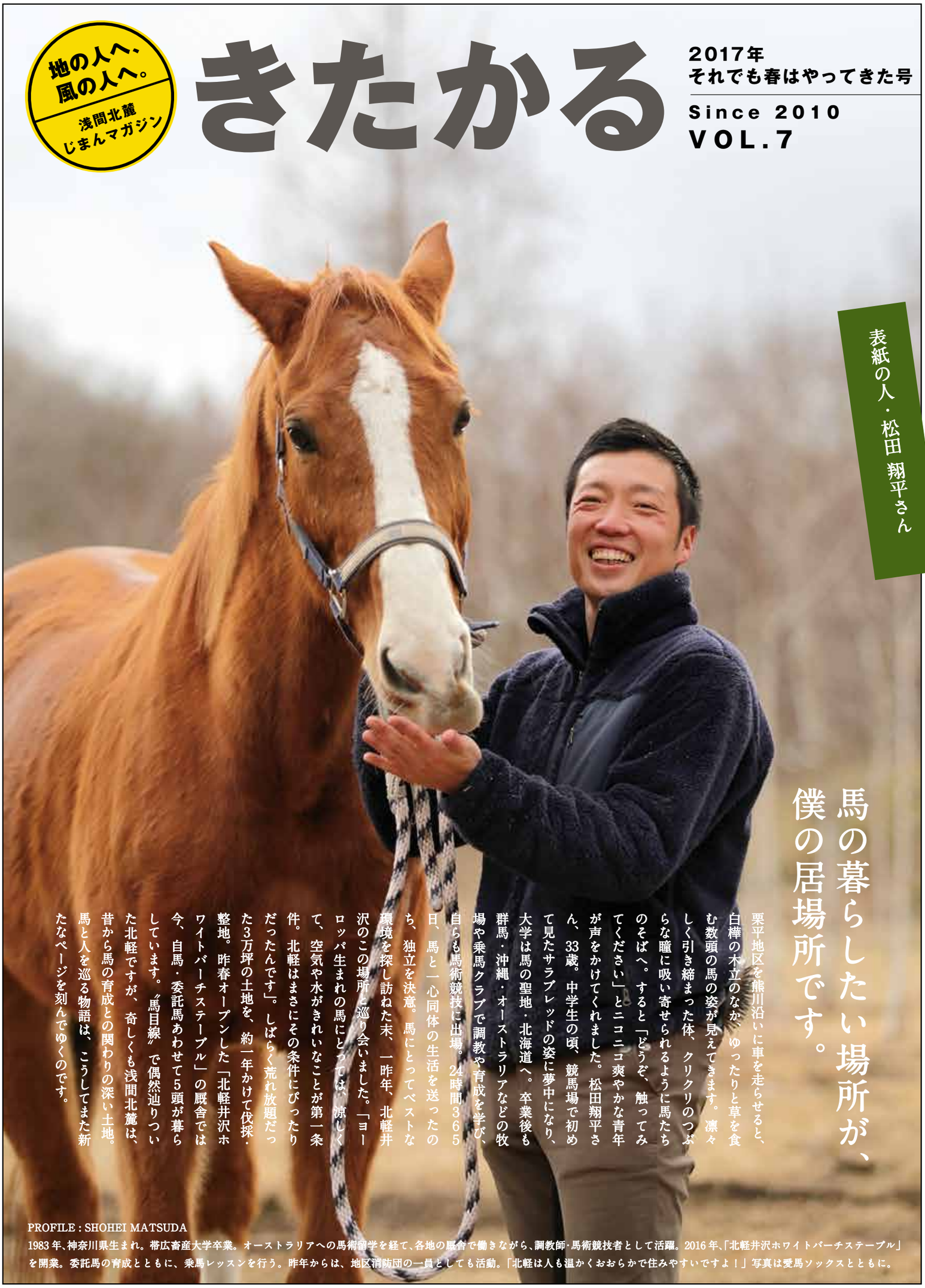
地の人へ、風の人へ。
浅間北麓じまんマガジン

きたかる

2017年
それでも春はやってきた号

Since 2010
VOL.7



表紙の人・松田 翔平さん

馬の暮らしたい場所が、僕の居場所です。

栗平地区を熊川沿いに車を走らせると、白樺の木立のなかゆったりと草を食む数頭の馬の姿が見えてきます。凛々しく引き締まった体、クリクリのつぶらな瞳に吸い寄せられるように馬たちのそばへ。すると「どうぞ、触ってみてください」とニコニコ爽やかな青年が声をかけてくれました。松田翔平さん、33歳。中学生の頃、競馬場で初めて見たサラブレッドの姿に夢中になり、大学は馬の聖地・北海道へ。卒業後も群馬・沖縄・オーストラリアなどの牧場や乗馬クラブで調教や育成を学び、自らも馬術競技に出場。24時間365日、馬と一心同体の生活を送ったのち、独立を決意。馬にとってベストな環境を探し訪ねた末、一昨年、北軽井沢のこの場所と巡り会いました。「ヨーロッパ生まれの馬にとっては、涼しくて、空気や水がきれいなことが第一条件。北軽はまさにその条件にぴったりだったんです」。しばらく荒れ放題だった3万坪の土地を、約一年かけて伐採・整地。昨春オープンした「北軽井沢ホワイトバーチステーブル」の厩舎では今、自馬・委託馬あわせて5頭が暮らしています。〝馬目線〟で偶然辿りついた北軽ですが、奇しくも浅間北麓は、昔から馬の育成との関わりの深い土地。馬と人を巡る物語は、こうしてまた新たなページを刻んでゆくのです。

PROFILE : SHOHEI MATSUDA
1983年、神奈川県生まれ。帯広畜産大学卒業。オーストラリアへの馬術留学を経て、各地の厩舎で働きながら、調教師・馬術競技者として活躍。2016年、「北軽井沢ホワイトバーチステーブル」を開業。委託馬の育成とともに、乗馬レッスンを行う。昨年からは、地区消防団の一員としても活動。「北軽は人も温かくおおらかで住みやすいですよ！」写真は愛馬ソックスとともに。

特集・浅間ウラ街道膝栗毛

浅間北麓の交差点

狩宿～応桑・今昔物語

江戸と上州、さらには信州・越後を結ぶ街道といえば、中山道から北国街道へと繋がる道をまずは思い浮かべるだろう。そちらは現在も国道として残る、いわば「オモテ街道」。しかし一方、ここ浅間北麓に、東西を結ぶもうひとつ重要な道が通じていたことをご存知だろうか。言うなればこちらは「ウラ街道」。そして〝人の道〟と同じく(?)、オモテよりもウラにこそ、面白い物語が隠れていたりするものだ。

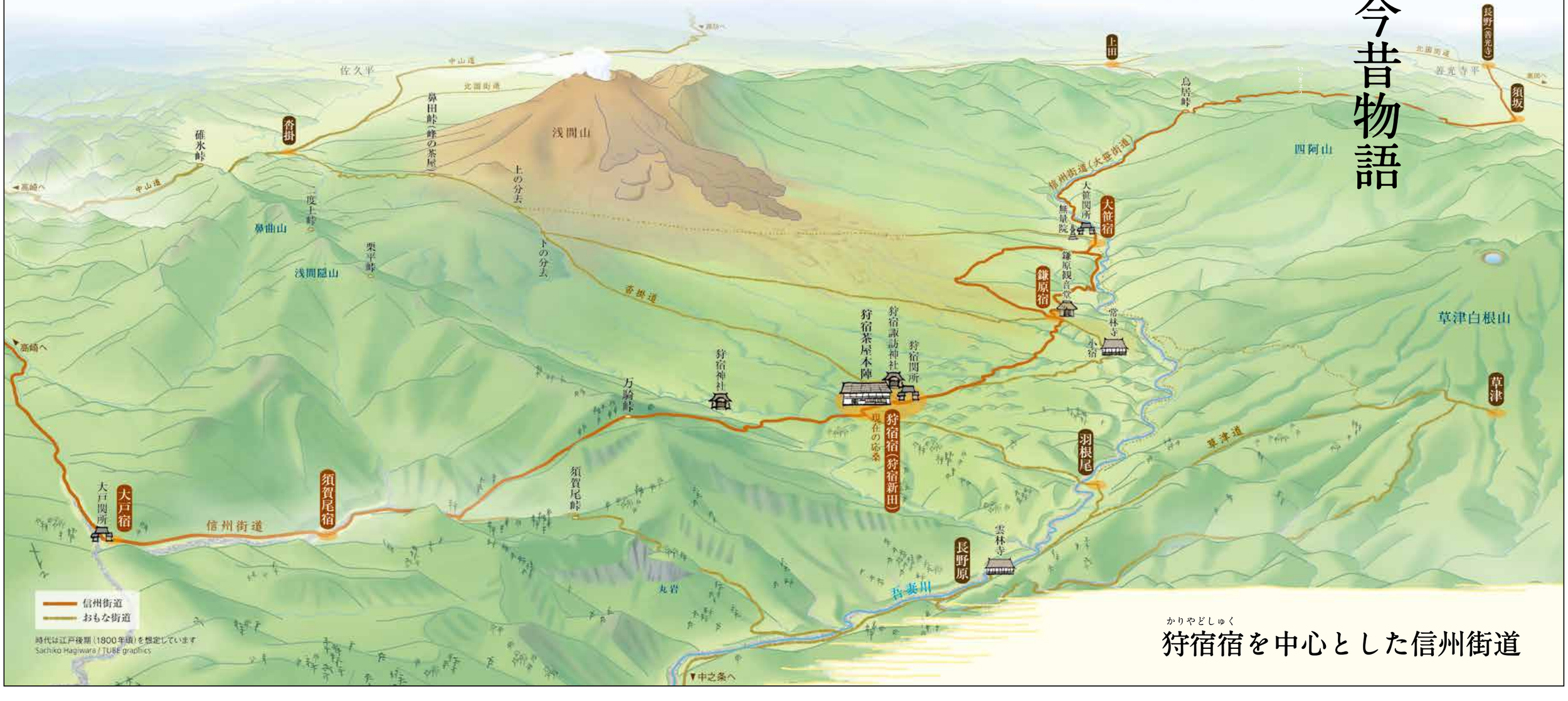
そのウラ街道とは、一般に「信州街道」と呼ばれ、高崎で中山道と分かれ、室田、三ノ倉、大戸を経て、須賀尾から万騎峠を越え、狩宿、鎌原、大笹を通り、鳥居峠を越えて信州へと入る道のことである。この道がいつ頃生まれたものかは定かではないが、源頼朝が狩りを行うために万騎峠を越えた記述が残ることから、中世には自然発祥し、真田の支配下でこの地の主要道として整備されたと思われる。江戸時代になると人の往来だけでなく物資の運搬路として、非常に重要な役割を担ってきたことは、この街道に3つの関所（大戸・狩宿・大笹）が設けられたことからもよくわかる。

3つの関所のうちのひとつ「狩宿関所」と、それに伴い生まれた宿場町「狩宿宿」とは、現在の応桑を指す。北軽井沢交差点から国道146号を北へ5キロほど進むと、応桑郵便局がある。この郵便局を斜め右（東）に入ると、応桑小学校のはずれにかつて関所があり（今も関所跡の碑が残る）、ここから鉤の手に曲がった先に宿場町が広がっていた。

狩宿に関所が設けられたのは、江戸前期の寛文4（1664）年だが、それ以前の真田統治の頃にはすでに私設の番所があったとも言われている。とりたてて特徴もない山あいのこの場所に、なぜ関所が必要だったのか？その疑問の答えを目で見て納得してもらえるよう作成したのが、下記の鳥瞰図である。ご覧のように、狩宿宿を通過しているのは信州街道一本ではない。中山道の沓掛（現在の中軽井沢）から峠を越えて浅間北麓（六里ヶ原）を横断し、さらには草津へと通じる「沓掛道」「草津道」と呼ばれる街道とが、ここ狩宿で交わっている。沓掛道・草津道も、戦国時代に草津温泉が全国的に知れ渡るようになったことから往来が増え、特に江戸時代には湯治客で多いに賑わった。また、善光寺に参拝する旅人にとっても、北国街道回りよりも時間的に短いため、沓掛道から信州街道（大笹街道）を経て須坂へと抜けるルートが人気となる。「入鉄砲出女」をはじめ、オモテの道は何かと堅苦しい取り締まりが多い。人も積み荷も、とやかく言われずスムーズに通れる道のほうへと自然と流れができるのは無理からぬこと。こうして、脇往還である信州街道や沓掛道がよく利用され、碓氷関所の抜け道にもなってしまっていたことから、狩宿にも関所が設けられたのである。

関所ができれば、宿場が生まれる。狩宿宿は「狩宿新田」とも呼ばれた。本来の狩宿という地名は関所よりも東側にあったが（現在も同名の集落が残る）、関所ができ、茶屋本陣（大名や武士などが休息する施設）などが整備され始めたことで、近隣の村からこの地で商いを行うため移住する者が増えた。現代に置き換えれば、ターミナル駅近くに生まれたニュータウンである。宿場には茶屋本陣をはじめ、旅籠、茶屋、馬宿、雑貨屋などが揃い、前述のような人や荷物の往来を考えれば、相当な繁盛ぶりだったことだろう。鳥瞰図で地形を見ても、狩宿宿は三方を山に囲まれている。つまりどの道を来ても、峠越えや足もとの悪い急坂を過ぎて、ようやくたどり着くオアシスのような場所だったに違いない。

開設からおよそ200年後の明治元年、関所は廃止され、明治7年には狩宿から応桑へと地名も変わるが、この地はその後も明治・大正・昭和の中頃にかけて、浅間北麓の交易の〝交差点〟であり続けた。その歴史のすべてを目撃してきたのが、「狩宿茶屋本陣」、通称「黒源」である。



狩宿宿（かりやどしゅく）を中心とした信州街道

特集・浅間ウラ街道藤栗毛

宿場町の記憶を宿す旧家「黒源」

「狩宿茶屋本陣」（明治以降は屋号の「黒源」の名で親しまれる）は、かつての関所前に現存している。当主の黒岩家に残された家系図によると、初代・黒岩源右衛門がこの地に移り住んだのは1600年頃。関所の開設以降は茶屋本陣を任され、問屋業も兼ねつつ、代々の当主は村の要職を歴任した。茶屋本陣が廃止されたのちは、旅籠業を続けながら、郵便局長や戸長を務め、明治から昭和30年代までは養蚕業も営んでいた。時代を見越した、なんともマルチな商いぶりである。

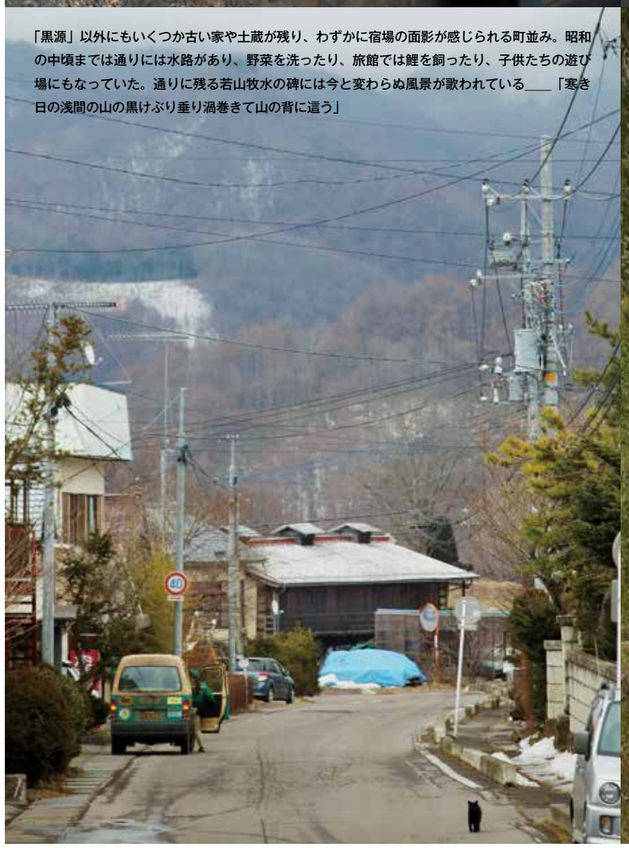
明治維新直後に家督を継いだ14代源十郎の弟・有哉は、北白川宮親王によって今の北軽井沢・応桑一帯に開かれた吾妻牧場の主事に抜擢され、親王からの信頼も篤かった。この関係から、北白川宮は牧場を訪れる際には「黒源」に宿泊。さらには、自身の第5王子（後の二荒伯爵）を有哉に預け、王子はここから応桑小学校に通ったこともある。親王の宿泊にあたり、「黒源」では水回りを新築し、畳や障子もすべて張り替えるなどの大騒動があったことは、黒岩家の人だけでなく、地域の人の語り草となっている。「黒源」にはこの他にも、文人や医者ら、旅の途中の識者が多く逗留したことから、応桑の人々は彼らとの交流を通して、比較的早い時期から文明や当世事情に開けていたこともうかがえる。

かつての宿場町も、昭和50年代の国道の付け替えにより交通量も減り、通りを流れていた水路も消え、往時の面影はほとんど見られない。それでも、この場所が300年間、近隣の交易と文明の中心地であったことは失われようのない事実である。老朽化の進む「黒源」も、3年前から歴史的価値を調べる調査が始まり、長野原町が主体となって文化財登録に向けた動きも本格化している。街道に刻まれた足跡をたどり、往来をいく人々の会話に耳をすましてみると、またひとつ、浅間北麓の知られざる「顔」が浮かび上がってくる。

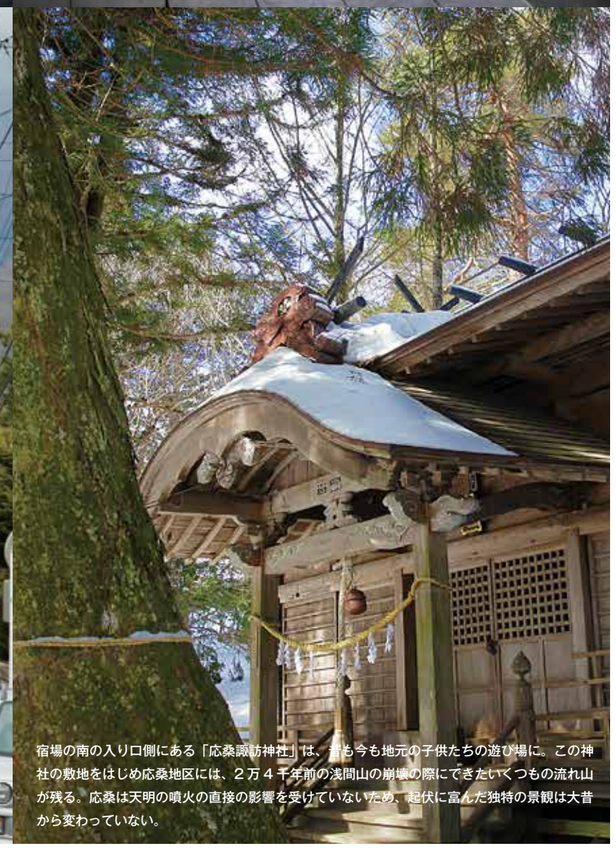
「黒源」内のかつての寝室（座敷）だった場所にて、先代の源二郎さん（'14年没）と妻の志つ子さん。夫婦と両親、子供たち家族は、昭和46年に隣に新宅ができるまでここに暮らしていた。「今ではこんなに傷んでしまったけど、それはそれは立派な建物でしたよ。冬は寒かったけれどね」と志つ子さん。先々代の齊治さんをはじめ代々の黒岩家では、家屋の不要な部分は取り壊したり改築を重ねながら、建物の維持に努めてきた。建物の2階には養蚕が行われていた当時の道具や機織り機などが今も残されている。

表の間の地袋の引違い戸には、和紙に金箔を貼り、版木で凹凸文様を打ち出した「金唐革紙」という高級壁紙が使われている。おそらく北白川宮の宿泊に伴い室内をしつらえた際の名残りだとされるが、この時代にこうした伝統工芸品を取り入れる例は地方ではかなり珍しい。この他に絵入りの板戸なども残されている。

「黒源」1階の奥には、本陣建築として特徴的な3つの座敷（表の間、中の間、上段の間）が並んでいる。8畳の上段の間は、床が他の部屋より高くなっており、宮家やかつての大名など上層階級の客が使用した。床柱や框に槐（えんじゅ）の木が使われていることから「槐の間」とも呼ばれていた。



「黒源」以外にもいくつか古い家や土蔵が残り、わずかに宿場の面影が感じられる町並み。昭和の中頃までは通りには水路があり、野菜を洗ったり、旅館では鯉を飼ったり、子供たちの遊び場にもなっていた。通りに残る若山牧水の碑には今と変わらぬ風景が歌われている____「寒き日の浅間の山の黒けぶり垂り渦巻きて山の背に這う」



宿場の南の入り口側にある「応桑諏訪神社」は、今も地元の子供たちの遊び場に。この神社の敷地をはじめ応桑地区には、2万4千年前の浅間山の崩壊の際にできたいくつもの流れ山が残る。応桑は天明の噴火の直接の影響を受けていないため、起伏に富んだ独特の景観は大昔から変わっていない。

「きたかる」四季カレンダー

春

冬がやっと去っていくと、
生命がバクハツするみたいに
一気に春がやってくる。
クラクラするほど緑が眩しい。
じっとしてたらもったいない。

夏

畑も忙しい、お店も忙しい、
あ～忙しい忙しい、と言ってる間に
過ぎていく一瞬。
おいしい水、おいしい空気、
ありがとう。贅沢な夏。

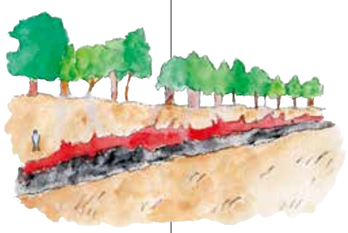
秋

夏の喧騒が終わったら、
自然がくれる恵みの季節。
山の実りや色とりどりの紅葉、落葉の香り。
たっぷりゆっくり、心に蓄える。

冬

雪の上の小さな足跡。
柔らかな炎と熱いストーブ。
寒さは長く厳しいけど、
北軽はやっぱり冬がいい。
つらら　つらら　つらつらら♪

3月



浅間牧場の野焼き（4月上旬）

枯草が草地を覆っているうちに行われる、浅間牧場の野焼き。遊歩道沿いの「丘を越えて」歌碑や四阿の周り約２ヘクタールを焼きます。

コナシが満開（5月中旬）

コブシ、山桜、と続く春の花のリレーを受け継ぐのはコナシ（別名ズミ）。赤い蕾が、華やかな純白の花を咲かせます。

4月

5月

カラマツの芽吹き（5月上旬）

カラマツが芽吹いて鮮やかな緑のベールがかかったように見えてくると、いよいよ春本番。カッコウの声が待ち遠しい。

6月

北軽マラソン（6月中旬）

標高 1000m 超の高原を走る「北軽井沢マラソン」、今年は6月18日(日)開催予定。アップダウンも激しく、ランナーに人気です。

7月

Ｔシャツで過ごせる時期は一瞬

真夏でも最高気温 27 度ぐらい、半袖Ｔシャツはほんの２週間ほどしか役に立たない北軽。夜寝る時は当然、掛け布団が必要。

8月

花豆の赤い花のアーチ（7月下旬～8月）

「あれは何の花!?」と初めて夏の北軽を訪れた人が必ず尋ねる、花豆の花。真っ青な空の下、鮮やかに咲く真紅の花です。

- 「きたかる朝市」：７月末～８月末の日曜日
- 「北軽井沢ミュージックホールフェスティヴァル」：７月末～９月上旬

9月

キノコ採り（8月下旬～10月）

早春の山菜採りと並ぶ楽しみ、秋のキノコ採り。ハナイグチやクリタケなど食用も多いけど、自信がなければ鑑賞するだけにして。

10月

ひと足早い紅葉はじまる（9月下旬～）

少しピンクがかった赤のツタウルシを皮切りに、11 月の黄金色のカラマツまで。他より早く、たっぷり紅葉が楽しめます。

11月

雪が降る前にたきぎ拾い（11月）

木枯らしが吹いた翌日はたきぎ拾い。ポキリと折れる乾いた枝だけを拾う。しっかり集めておかないと、冬じゅう心許ない思いをしないとならない。晩秋の大事な冬支度。

浅間山が初めて白くなる（11月上旬）

浅間の初冠雪は、例年 11 月初め頃。山に３回雪が降ると麓にも雪が降る、というのが北軽の定説です。

タイヤを履き替える（11月下旬～12月上旬）

白いものが何度か舞ったら、あちこちで「もう替えた？」「そろそろかな」という会話が始まる。11 月末は冬タイヤ交換のピーク。

- 「わくわくフェスタ」：10 月半ば
- 「浅間モーターフェスティバル」：11 月初旬

12月

日中の温度計がマイナスを示す（12月中旬）

国道 146 沿いや栗平の温度計が、氷点下を示す日が多くなる頃。１月に入れば、いよいよマイナス２ケタに。

1月

2月

カモシカが見やすい時期

散歩中にふと視線を感じ、振り向くとカモシカがじーっとこちらを見つめている。山の斜面でひなたぼっこする姿もよく見られます。

炎のまつり（2月中旬）

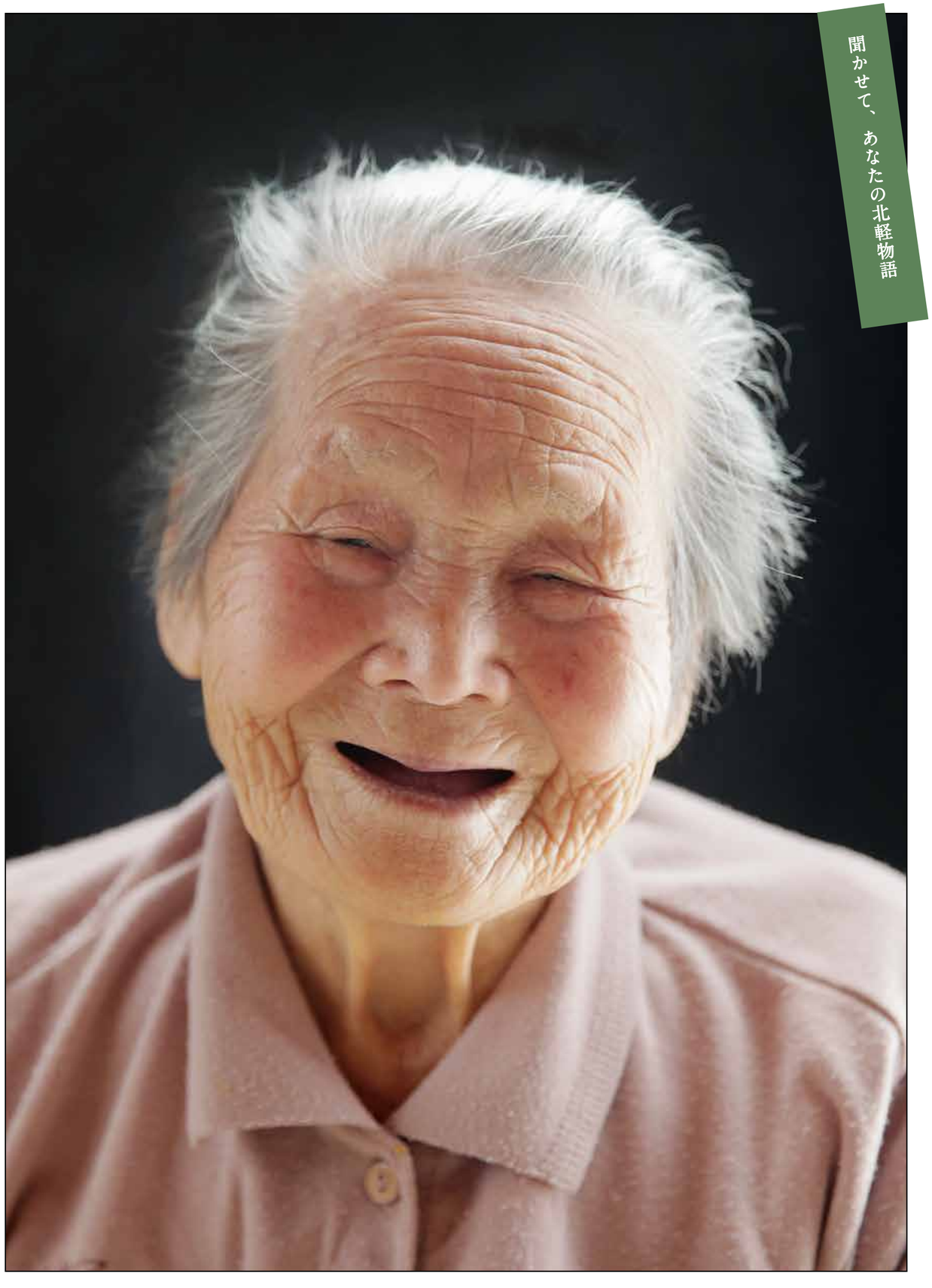
雪原にろうそくで描かれるアートが幻想的な「炎のまつり」。息も凍る寒さの中で見る打ち上げ花火は、いっそう美しい。

冬茜の空（1～2月）

冷たく乾いた風が吹くような日に、ほんの束の間、西の空にあらわれる劇的な夕焼け空。日の沈む方角だけでなく、茜を反射する北側の山の稜線も見逃せない。

- 「浅間高原雪合戦」：２月初旬

3月



こっちには、鉄釜ひとつ背負ってきたっきり。ほかにはなんにも持ってこなかった。（岩田志知さん・99歳）

レタスやトウモロコシなどの高原野菜畑と酪農牧場が悠々と広がる北軽井沢・大屋原地区。爽やかな高原の象徴のようなこの景色も、自然にこのような姿になったわけではありません。つい70年前までここは、落葉松と熊笹の生い茂る、石ころだらけの荒れ地でした。

終戦後の昭和21年、春。この場所にやってきたのは、おもに満州から引き揚げてきたばかりの勢多郡木瀬村（現前橋市）出身の人々です。敗戦の混乱のなか、家も財産も、なかには家族まで失いながら、故郷に帰ることも許されなかった人々は、生きていくためには新しい土地をみずから切り拓くしかありませんでした。

大正7年生まれの岩田志知さんは、今では数少なくなってしまった入植当時を知るおひとり。志知さんと亡き夫の光男さん、息子さんとで拓いた土地は、酪農から野菜農家へと形態を変えながら、二代目、三代目へと受け継がれつつあります。息子の紀重さん夫婦、孫の修一さん夫婦と3人の曾孫との賑やかな4世代暮らし。99歳になる今も、夏場になれば草刈りなど、野に出続けるお達者ぶり。当時のことを聞かせてほしいとお願いすると、「もうあんまり憶えてないけれど」と困った顔を見せながらも、ぽつぽつ、ゆっくり、記憶をたぐるようにお話をしてくれました。

私らが行ってたのは、満州、吉林省の駅馬村ってところでね。昭和17年に入って、終戦になるまで。おやじさん（ご主人の故・光男さん）とは満州行く前に行き会っていたの。向こうの人でもリーダーを務める）らがここがいいってことで、世話してくれて。こっちには、鉄釜ひとつしょってきたっきりで、なんも持って来なかった。最初は、御所平の昔の兵隊さんが住んでたところにお世話になってね。

ここはほら、皇室の人（※北白川宮）の牧場だったとこだから、周りじゅう高い土塀が築いてあった。最初に男の人が入って、丸太を家のようにして。木は伐ってあったけど、

開墾して最初は、粟だのキビだのこさえて、そんなの食べてたね。ジャガイモを遅くなってから植えたら、土地の人に「今頃になって植えたんじゃあ」って笑われて。それだって小さくたって食べられればね。配給で砂糖なんかはもらえたけど、腹の足しにはなんないから。幾年かたってから小麦が獲れるようになって、それを応桑のほうで粉にしてもらうために通って。

農地は広いとこもらえても、水の出るところだったり山高が多かったり、みんな苦労したよ。だいぶ経って車が入った頃に見に来た人が「なあに、大屋原ってとこはこんな平らでいいねえ」って言われたけど、これだってみんな、もとは凸凹だったのを平らにしたんだよ。道だってみんなで苦労してね。やっといいとこになったんだよ。圭太郎さんみたいな立派な人がいたから、どうにかなったんだね。

こっちに来て生まれた長男（紀重さん）が中学を出る頃に、おやじさんが亡くなったんでね。そこからは、15歳のせがれと働けるだけ働くだけ。そのせがれが今、69歳になってね…。楽しかったこと？　そんなのはなかったねえ…。苦労の苦労。どうにかこうにか、ねえ……。

そこまで話すと、黙り込んでしまった志知さん。ここでは触れていませんが、話の途中、満州時代に亡くした2人のお子さんのことに触れたときには、涙ぐむ様子も。せめてなにか楽しい思い出はないかと問いかけたことが、気に触ってしまったかもしれないと後悔していると、付き添っていた孫の修一さんが助け舟を出してくれました。「ばあちゃん、よくここから浅間山見てるよなあ。今日もまた煙出てるなあって。」それを聞いて、「そうだねえ、山はいいやねえ」と、ふっと頬を緩ませた表情は穏やかで、とても印象的でした。

私らが作った畑で大豆やもろこしをこさえて。日本人が勝っていたときだからね、開拓といっても手間はかからなかった。ほんとに大変だったのは、こっちに来てから。

終戦になって一年くらいは向こうにいて、治安がよくなったからってアメリカの船に乗って、やっとこ帰ってきた。圭太郎さん（※清水圭太郎＝駅馬開拓団団長、大屋原開拓根っここいだり起したりから始めて。ここんとこは水がなかったからね。水がなくて、土地の人も入らなかったんだから。水を汲みに、下の沢まで行って担いでくるってのをどうにかやったよ。水道なんて通ったのはずうっと後だ（※調べたところでは昭和37年くらいとのこと）。初めのうちはほんとに容易じゃなかったんさね。

抜群のチームワークと自慢の肩で、大健闘！「北軽小スノーボーイズ」。

キリッと眩しい青空が広がった2月初旬の週末。今年も2日間にわたって、冬の恒例イベント「第17回浅間高原雪合戦」が開催されました。北軽井沢住民にはすっかりおなじみとなったこの大会。地元のお祭りなどを盛り上げる有志グループ「北軽ボンバーズ」の呼びかけで、町おこしの一環としてスタートしたのが2001年。以来、年々参加チームも増え、今では日本選手権の関東予選会場として各地から精鋭チームが集い、熱戦が繰り広げられます。

開会式に続いて行われたのは一般の部の予選と小学生の部。小学生の部には、北軽井沢小学校の高学年男子で結成された「北軽小スノーボーズ」が登場。7人のメンバー中5人は野球部に所属しているだけあって、フットワークと肩の強さには自信あり！フォワードは鋭く前線に切り込み、緩いロブと直球を織り交ぜて攻撃。バックスは敵の玉をうまくよけながら、手持ちの玉を切らさないよう補給します。

雪合戦はチームワークが勝敗の鍵。コーチの星野真一さんによると、作戦はほぼ子供たち自身に任せているのだとか。コート内でも声をかけあい、大人顔負けの冷静な状況判断と連携プレーは頼もしい限り。一発で勝利を決めるフラッグ（相手チームの旗）奪取にも成功し、見事予選ブロックを一位通過！　準決勝では惜しくも破れ、全体の4位に終わりましたが、子供たちはみんな大健闘。この経験を糧に、数年後、彼らがまたこの場所に戻り、大会を盛り上げていってくれるに違いありません。

（左上から時計まわりで）高井大和くん、及川聖磨くん、佐々木大和くん、稲垣環くん、木方海都くん、高井隼人くん、比嘉蒼平くん

北軽あるある

初めて訪れる人からしたら「なんじゃそら」な、北軽井沢ならではの常識。
キタカリアンなら一度は訊かれたことがあるだろう問い、それは「北軽の人って何して遊ぶの？」。質問の裏に見え隠れする、何が楽しくて住んでいるのか分からないといったマイナスイメージを払拭すべく、
地味だが非常に中毒性の高い遊びについて語りたい。

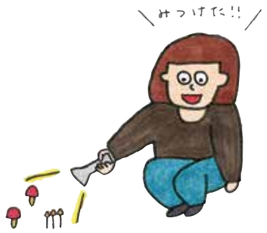
「あるある～ヤミツキ遊び～」

「あるある１」川で魚とり

昼休みにスマホでゲームをするが如く、近場の川で魚釣りをする。車には釣りセットを常備。

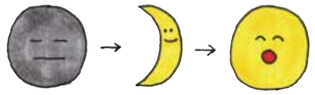
「あるある２」夜のキノコ探検

夕食後に懐中電灯とピンセットを持って外に出ると、日中は視界に入りもしなかったキノコが目に飛び込んでくる。外見も違えば、生育度合いも様々。出たて、傘を開いたところ、朽ちかけなど。地味でマズそうなキノコでも、小さな虫が食事中だったりする。道端や自宅の庭で開きかけのキノコを見つけたら、ピンセットでそっと引っこ抜いてみてほしい。ひ弱な外見とは裏腹に、地面にしがみつく力が強い。崩さずにスッポリ抜けると、イヤなことの３つくらい忘れられそう。世にいうキノコ狩りとはまったくの別物行為。



「あるある３」月の光の力比べ

星明りもない新月の夜は、自分の手のひらもよく見えない。三日月になると朧気に手の形っぽいのが見える。満月は、手相も見ることができる。影が濃いから影踏みもできる。



「あるある４」誰かの家で農村芸術クラブ

農業も観光業も休息をとる冬。誰かの家に集まって木彫りの道祖神を作ったり、わら細工を作ったりする、にわか工作クラブの結成。傍らで燃えるストーブで餅などを焼いて食べることもあり、場合によっては、そっちが主体になることもある。

「あるある５」ツララ落とし

春が近づいてくると、屋根の雪が融けてできる長いツララ。これをホウキの柄などで叩き落とす。状況をよく確認して行わないと危険。危険を理由に、子供にはやらせず、大人が好んでやったりする。

「あるある６」夜の北軽サファリツアー

ケモノが出そうな気配のある夜、マイカーでドライブ。勘が当たると、鹿の大群、猪一家、単独キツネ、さまよいタヌキ、茶色い野うさぎ、チョロチョロ野ネズミ、夜啼きフクロウ、岩のようなクマ、樹上を渡るモモンガ、孤高のカモシカなどに遭遇。※勘が外れると何も出ない。

イラストレーション／NANA

「きたかる建物応援団」がゆく！

〈第四回〉森と生きる滝原集落

絵文　伊郷吉信

残された養蚕建築群

狩宿の関所跡や旧狩宿茶屋本陣がある応桑の東に滝原の集落がある。滝原はかつて11戸ほどの世帯が暮らしていたが、空き家も多く、今住んでいるのは7、8名という。平家の落武者集落だったという話を風に聞いたが確かに時の流れに取り残されたような佇まいである。まだ屋根には雪が残り、軒から氷柱が下がっていた。日が陰り始めたので、急いでスケッチブックを取り出し水彩画を書き始めた。すると絵の具が固まり伸びていかない。なんと！絵筆が凍ってきたのだ。暮らすに厳しい土地と感じた。滝原を訪れるのはこれで3度目だが、疑問だったのは、いい時代があったのか大きな家が多い。一際目を引くのは萩原Mさん宅の門で大戸の名家加部安左衛門宅からの移築という。その北の萩原Cさん宅も桁行約10間ほどもある大きな養蚕農家である。滝原の人は1戸を除き皆萩原姓である。ここでは長野原町にとって重要な人材を輩出している。厳しい自然環境のなかで育ち、物事を観察することに長けていたのだろう。

さて、滝原の民家は、出梁造りという2階が下階より張り出した外観をしている。養蚕農家では2階の作業面積を増やす必要があり発達した形式である。また屋根は緩勾配の切妻である。昔はササ板と呼ぶ栗の板葺で石置だった。明治の一時期には養蚕が盛んであったと考えられる。ただ、滝原で養蚕は年に一度、夏しかやっていなかったと言う。どうも凄みがない。上州は「繭の国」と言われる程で中居屋重兵衛に代表される上州商人が多く活躍し、養蚕技術は目覚ましい進歩を遂げている。明治7年には狩宿村、小宿村が合併し大桑ならぬ「応桑村」と命名し、養蚕による村の振興を目指したのである。しかし、現実は厳しい。土地は冷涼で養蚕に適さず、餌となる桑の葉も育ちにくい。この地域の養蚕は大正時代には衰退したのである。

この地域のもうひとつの生活の糧は薪炭であった。山に入り炭焼小屋で炭を焼いた。木を利用する事は森から生命をもらい森に生かされるということだ。この集落に感じる慎ましさは森に生きる慎ましさなのかもしれない。自然はしたたかで、ただひたすら生きている。それに寄り添って生きた人々もまた、ただひたすら、さりげなく生きてきたのだろう。

「自由建築研究所」代表。協同組合「伝統技法研究会」副理事。NPO「あさま北軽スタイル」理事。設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「こぶしの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢・長野原町とも縁が深い。

ある女の子の言い分

谷川俊太郎

あさまやまはいつも　だまっているでしょ
ふんかするときだって　ことばでおこったりしない
からまつのはやしも　しずかです
あきになって　たえずおちばをちらすときだって

わたしもここにくると　むくちになる
とかいではことばがないと　ふあんだけど
ここではすまほをうちにおいたままで　わたしはあるきます
だれもいないみちをあるいて　かわにあいます

かわはささやくけれど　それはヒトのことばではない
わたしはどうして？なぜ？と　といかけるのをやめます
だってせかいは　にんげんがつくる〈いみ〉でできてるわけじゃないから
にじも　にゅうどうぐもも　ゆきも　わたしはただ　だいすきなだけ

ここにいると　すっきりひとりになれます
ひとりがさびしくなくなって　ひとりのじぶんがすきになる
きょうのゆうやけは　すごーい！
ここにいるぜいたくを　ゆるしてくれているのは　だれ？

谷川俊太郎（Shuntaro Tanikawa）

1931年東京生まれ。詩人。1952年第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。以後、詩、エッセイ、脚本、翻訳などの分野で文筆を業として今日にいたる。詩集に『みみをすます』『日々の地図』『はだか』『世間知ラズ』『あたしとあなた』など、エッセイに『ひとり暮らし』『一時停止』など、絵本に『わたし』『ともだち』『もこ　もこもこ』『かないくん』など、本誌アートディレクター・カメラマン田淵章三との共作に『子どもたちの遺言』『今日までそして明日から』がある。昭和5年、法政大学村に、父・徹三氏が山荘を建てたことから、北軽井沢は、子ども時代の夏休みを過ごし、のちに妻となる女性とも出会うなど、思い出とゆかりの深い場所。今でも毎年、夏の2ヶ月間は、北軽井沢に滞在している。

編集後記

「じねんびと」から「きたかる」読者の皆さまへ

いつもご愛読いただき、ありがとうございます。〝北軽井沢の誇りと愛着を探す旅〟をコンセプトに、リニューアル創刊して以来、4回にわたり発行することができたのも、長野原町のバックアップと皆さまの応援のおかげです。

「じねんびと」は、北軽井沢とその周辺住民の有志による任意団体です。私のように酪農に携わる者、建築や観光など地域の様々な事業体を営み働く人、移住・定住者などさまざまな会員が活動に関わっています。立場や地域との関わり方はそれぞれ違いますが、この地を愛する気持ちは皆同じです。これからも地域の諸団体・組織や住民の方たちと連携し、発信を続けていきます。

編集部や北軽井沢観光協会などにお寄せいただいた応援のメッセージ、叱咤激励のお言葉に改めて感謝いたします。

「北軽井沢じねんびと」会長　眞下 豊

編集作業も大詰めを迎えた3月半ば。氷点下の北軽を抜け出し、奈良で開催中の弊誌カメラマン・田淵三菜による「into the forest」展へ。昨年末に発表された「入江泰吉記念写真賞」受賞記念となる写真展。広い会場を、北軽井沢の森の四季を捉えた120枚の作品が埋め尽くす。彼女がひとりで、分け入り、彷徨い、泳いだり、寝転がったりしながら（目撃してはいないが目に浮かぶ！）夢中で撮り続けた写真には、見慣れているはずの森の、見たこともない姿が収められていた。自分が見て、知った気になっていた世界が、ぽろぽろ剥がれ落ちる。悔しい。でも同時にムラムラと嬉しくなった。見えていなかったのなら、もう一度、見つめ直せばいい。森も、山も、大地も、人の暮らしも、北軽はまだまだ奥が深い。繰り返しのようでまったく新しい春が、もうすぐそこに近づいている。（F）

きたかる vol. 7
2017年4月発行
企画・編集・制作／きたかる編集部
［編集長］藤野麻子［編集］AKIKO・福嶋悠貴　［写真］田淵章三・田淵三菜（森の写真館）［デザイン］田淵章三［WEB 制作］G+G
発行／北軽井沢じねんびと
印刷／上毛新聞 TRサービス
※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。

お問合せ：きたかる編集部
メールアドレス：info@kitakaru.me
住所：〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1924-1360
「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。

「きたかる」ホームページ　http://kitakaru.me
北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB 版も更新しています。

※本誌掲載の写真・文章を無断で複写・複製・転載することを禁じます。